東京のまちなみの多様さ

西村 幸夫　東京大学 副学長・先端科学技術研究センター 教授

「谷根千」といった造語がすっかり定着してしまったように、このところ江戸風情や下町風情はひとつの名詞として地名と結びつけて容易に表現することができるようになってきた。そうした土地をたずねるまちあるきも徐々に東京人気のルートとなりつつある。巣鴨のとげ抜き地蔵沿道は別格としても、神楽坂や荒木町、柴又帝釈天や新井薬師などの人気も根強いものがある。外堀そのものもよくよく見るとたいした歴史遺産である。たとえば市ヶ谷駅から四谷駅までの法政大学側を外堀沿いに歩くと、都市を守るということの姿が実感できる。最近はブラタモリの影響もあってか、まちの歴史の痕跡をたどりながらまちあるきをするという趣向も都会人の楽しみ方のひとつとしてそれほど特別なものではなくなってきたといえるかもしれない。

23区以外でも、府中の大国魂神社へ向かう参道をはじめとして、青梅にも八王子にも、五日市街道沿いにも、かつての面影を偲ぶことのできるまちなみは残されている。

たしかに東京は、その後の都市改編がいかにおおきかったとはいえ、起伏に富んだ地形や新田開発の歴史などおいそれとは消し去ることのできない風景の構造を有しており、それが至る所に過去の痕跡として残されているため、意味のあるまちなみの風景を生み出している例も数多い。

ところが最近、大学で学生の卒業論文や卒業設計を見ていると、これらの定番とはまたことなった東京のおもしろいスポットを見つけてくる学生が多いことに気がついた。彼らが「発見」するのは、たとえば江戸川区の緑道沿いや新宿6丁目の明治通りの奥、同じく新宿区の山吹町の区画整理地区や箪笥地区、井の頭線の久我山駅と神田川が接近しているあたり、小田急線の狛江駅周辺、品川区大森南地区や大田区南六郷二丁目地区、荒川区町屋地区、埼京線の浮間舟渡駅周辺、横浜の子安浜、川口駅西口周辺などの土地である。

いったいこうしたところに何があり、どのような風景が若い学生たちを引きつけるのか。

そこで彼らが発見してきたテーマというと、かつての農村とその後の市街化との接点（江戸川区、狛江）、駅から見える都市小河川（久我山）、おそらく過去の農道の歴史を引きずっているために微妙に矩形からずれる道路パターン（山吹町）、自然発生的道路と大幹線道路の関係（新宿6丁目）、工場ネットワーク（大森南）、多文化共生ネットワーク（川口）、高齢者介護のネットワーク（町屋と箪笥地区）、都市にスポット的に残る水辺空間（浮間公園と南六郷緑地）や漁村集落（子安浜）といったものである。

それまでだれも目にとめることもなかったような当たり前の都市風景やあまり価値を認めてこなかったややくたびれた日常風景に、若い感性は興味を覚え、可能性を感じているようなのである。こうしたところをターゲットにして、あるいは歴史をさかのぼり、あるいは生活者のネットワークを探り、意義深い風景の意味を見つけようとしている。

これはあたらしい風景の可能性ではないだろうか。東京のまちなみの多様さが若い感性を刺激して、おもしろい都市分析を生み出しつつある。この先に東京のまちなみのどのような可能性が広がっているのか、楽しみながら今後の展開を見守っていきたいと思う。

西村 幸夫（にしむら　ゆきお）

1952年、福岡市生まれ。東京大学都市工学科卒、同大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年より東京大学教授、2011年より副学長。この間アジア工科大学助教授（バンコク）、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。
専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画など。工学博士。
主な著書に『西村幸夫 風景論ノート』（鹿島出版会、平成20年）、『都市保全計画』（東大出版会、平成16年）、編著書に『まちの見方・調べ方ー地域づくりのための調査法入門』（朝倉書店、平成22年）、『観光まちづくり』（学芸出版社、平成21年）、『都市美』（学芸出版社、平成17年）、『日本の風景計画』（学芸出版社、平成15年）など。